



私の役割
komachi's point

各業者への指示、現場の進捗状況確認、自主検査、内業など、自ら手を下さないとはいえ、現場監督の仕事は多岐に渡る。

輝け!

けんせつ小町

現場監督

太田美鈴

鎌倉市立大船中学校改築工事
大船建築作業所



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

多くのゼネコン社員が建設現場で担当する仕事、それが「現場監督」だ。スポーツの監督のように、現場監督はプレイヤーである職人たちに適格な指示を出してプロジェクトを成功に導かなければならない。今回は、若き女性現場監督にその仕事ぶりや建設業界への思いを聞いた。



「最初からゼネコンをめざっていた」

現場監督・太田美鈴は、一九八七（昭和六十二年）、北海道江別市生まれ。物心ついたころから建物に興味があり、また図工も得意だった。高校は普通科だったが、女性の自分には力仕事は難しいと思い、施工管理を学ぼうと考えた。

「どうしても建設の仕事に携わりたくて、いろいろ探してみたら『現場管理』っていうジャンルがあるのを見つけて。これだったら、自分でもがんばればできるのかな、と」

北海道の職業能力開発大学校に進学し、建築施工システム技術科を選択した。

「男女比は五対一くらいで、やっぱりゼネコンに就職する人が多いです。最初は建築施工がどんなものかもわからないので、学内の実習場で作業服を着て、鉄筋とか型枠を組み立てる作業をやってみたりしましたね。現場がどうやって進むのか、それで一通り体験した、という感じですよ」

「現場監督になる」って言ったら、両親はやりたいをやりにさいと言ってくれました。ただ、男の人が多から気をつけなさい、とも（笑）」

マンションと学校建設の違い

太田の現在の勤務地は、鎌倉市内の公立中学校建設現場。これまではマンションの現場が多

く、学校を手掛けるのは初めてだ。

「今はまだ躯体の段階ですが、マンションとはすべてが違いますね。マンションはそこに常に人が住むようになりませんが、学校だと不特定多数の人が出入りするようになる。躯体のベースは一緒ですが、仕上げの方法、利用する人や利用頻度、壁紙があるかないかっていう細かい部分も含めて、違う点は多いです」

今回の物件は新築ではなく改築。既存の中学校の敷地内にプレハブの仮校舎があり、そこを供用しながら新校舎や体育館、部活棟などを建てていく。

「資材を搬入するルートと、生徒さんが通るルートが交差する部分があるので。中学生、特に男の子は元気があるので、休み時間なんかはすごい勢いで走ってきたりする。万が一それで職人さんと接触したりしたら大変なので、そういう点でも気を遣います」

また、現場の土地は水はけがあまり良くなく、基礎の土工事をしている最中に雨が降ると、ぬかるみに悩まされた。

「今年の夏の雨は特にすごかったです。排水用のポンプを何個もセットしているんですけど、それでも排水が追いつかなくて。もうみんなバタバタでした」

「性別を気にせず仕事をしたい」

現場監督は、何人もの職人を指揮して工程と



自分よりずっと年上で経験も豊富な職人と、対等に渡り合う。「互いに良い仕事をするためですが、厳しいことも言いますし、言われます」

めざしていた業界で、
今働いている。
やりたいことをやっている、
という喜び

私の
仲間
komachi's
point



上/鉄建建設(株)・佐藤作業所長、校舎棟の担当職員のみなさんと。「同期や同年代が多く、いい意味でライバル意識が高い現場です」

下/太田が担当する鎌倉市立の中学校建設現場。メインの校舎棟はRC3階建て、ほかに屋上プール付の体育館などがあり、来年6月の竣工をめざしている。

komachi MEMO

「趣味は写真です。風景とか動物とか、動物園や水族館に行って撮っています。現場でも工事写真を山ほど撮ってるじゃん、ってよく言われるんですけど(笑)」

おり、設計図どおりに建物ができ上がるように見守り、時には指導する立場だ。監督が引っぱると思案で言いたいことも言えないようなタイプではなかなか務まらない。

「今言っても信じてもらえないのですが(笑)、働き出す前は人見知りな人が多かったんです。でもこの仕事だと、初めて会う人も多いし、それを躊躇していたら仕事にならない。自分で自分を変えていくしかなかったですね」

自分の犯したミスが、どれだけ多方面に影響するかを思い知らされることがあった。

「足場を担当していた時に、材料を数えて仮設材を注文したんですが、数え間違いで必要な数の半分しか発注できてなくて。届いてみたら全然足りないから、職人さんに『これじゃ、仕事にならねえ!』って怒られたことがあります。『ああ、失敗したな、何でもう一回確認しなかったのかな』ってものすごく悔しくて自己嫌悪になりました。歯を食いしばって乗り越えました。が、その次からは最低でも二回確認してから物を頼むようにしています」

「今の現場のチームワークはいいですね。重いものを運ぼうとしていたら、後輩たちがどこからともなく現れるし。でも基本的に女性も男性も関係なく仕事に向き合っているのが理想だと思います。私自身、あまり性別を気にしないで、昔から携わりたかった建設業界に入って、自分のやりたい仕事をやっているという意識の方が強いですね」

現場の雰囲気を変える存在

とはいえ、まだまだ男性が多い建設現場に若い女性がいれば、空気も変わる。鉄建建設(株)・佐藤達哉作業所長は、太田のおかげで雰囲気や和らぐ、と教えてくれた。

「現場の規模にもよりますが、ちょうどここくらいだと、彼女のおかげで現場の雰囲気がちょっと柔らかくなりますよね。ベテランの職長さんたちからしたら、娘か、孫みたいだな

profile

おおた・みすず◎1987(昭和62)年、北海道生まれ。地元高校を卒業後、北海道職業能力開発大学の建築施工システム技術科で施工管理を修了。その後鉄建建設株式会社に入社し、数々の建築現場にて躯体工事を中心に現場監督を担当。現在は、建築施工管理技士の資格取得もめざしている。

存在でしょ。かわいがってくれるし、太田が頼みにいけば面倒なことでも『じゃあねえな』って引き受けてくれるっていうのは間違いなくありますよ」

現場監督として、心がけていることは？

「会話する時のメリハリでしょうか。職人さんに何か進めてほしい時はちゃんと依頼するような話し方で、そうじゃない休憩中の話だったら雑談っぽく話すとか。監督だからって偉ぶ

るのではなく、人対人のつきあい、わからないこともちゃんと言葉にして初めて伝わるものだと思うので、そこは大事にしています」

これから建設業界をめざす女性に一言…。

「あまり気合いが入り過ぎていると、ちょっとくじけた時に立ち直るのが大変なので、気負わないくらいがちょうどいいと思います。あとは元氣よく仕事ができれば、どんな人でも十分務まります」



上／腕力のない女性でも、大勢の職人たちをまとめ上げることができる。それが「現場監督」という仕事の醍醐味だ。

下／「ここまで来た以上、ゆくゆくは所長になって、女子の多い現場を作ってみたいですね」